

クリエイティブひがしね ニュース

発行 NPO法人クリエイティブひがしね 999-3796 山形県東根市中央1-5-1 タントクルセンター内
TEL 0237-43-1155 www.higashine.org 発行責任者 菊地 和博



青空保育たけの子



おおき森の幼稚園



外部視察研修

たつのご保育園



海岸公園広場



白石地域子育て支援センター



NPO法人こども∞感ばにー



たつのご保育園



げんきキッズパーク



接遇マナー研修

2頁本文「研修報告」をご覧ください

「子ども目線」と「親目線」

広報・地域振興担当理事
村田 民雄

京都の亀岡市で「かめおか子ども新聞」という月刊紙が発行されている。子どもたちが作る大人向けの新聞とのこと。その中の「大人の悩み相談」欄がこのほど単行本になった。「子ども悩み相談」の真逆、相談者が大人で回答者は子ども記者である。これが痛快で思わず笑いながら、その突っ込みに感心してしまった。

何例か紹介すると、①「5歳の娘が本当にいう事を聞きません」⇒回答「子どもとはそういう生き物です。親は子どもを都合よくコントロールしようとしすぎ！ 僕はロボットちゃう」。②「5歳のわが子に矛盾を指摘されています」⇒回答「親って自分が言っていることとやっていることが一致してないのが問題だと思います。もう大問題。滝に打たれたりして自分を見つめ直して、心を入れ替えてください」。③「子どもの小学校受験に夢中の妻、小さい子に勉強は必要ですか」⇒回答「そんな妻アカンデ！子どもの自由を奪う悪い人だと思います。親がいろいろ決めなくとも、子どもは子どもで自分で決めます」といった調子だ。

小学生の頃はやった小話に、「ワシントンは子どものとき一所懸命勉強したからアメリカの大統領になれたんだ」という親の説教に対して、子どもは「ワシントンはお父さんのころには大統領になっていた」と反撃、親をギャフンと言わせるというのがあった。同じようなパターンなのだが、「大人の悩み相談」には現代の親子関係が映し出され、思わずわが身をふり返ってしまう。

「子ども目線」と「子どもに寄り添う」という似たような言葉がある。どちらも同じような意味合いで使われているが、この「悩み相談」を読んで大きな違いがあることに気がついた。「親目線」の相談に、回答者は「子ども目線」でやり返し、親の気づかない矛盾を指摘している。親は子ども時代に出来なかったことを子どもに押し付けていることを見抜いているのだ。

これに対して「寄り添う」は「守り・守られる」強者と弱者の関係になる。それを否定するものではないが、「子ども目線」を子育てにどう活かしていくか、親力が試される場面ではないだろうか。

外部視察研修報告

7月10日(水)の休館日を利用して、視野を広げるために職員たちが5つのグループに分かれて外部視察研修を行いました。新しい発見と気づきがたくさんあった、実り多い研修の報告です。

白石市/地域子育て支援センター こじゅうろうキッズランド

地域子育て支援センターは、白石市ふれあいプラザという複合施設の中にありました。年齢別に参加するひろばが決まっており、ハサミやのり、ペンの使い方や座ってお話を聞くということを学んでいきます。運営しているのが市立保育所の保育士の方のため、将来入園する子ども達が困らないようにと細かくプログラム内容が決められていました。こじゅうろうキッズランドは、建設前に市長(当時市議員)がけやきホールに視察に来られたとのこと。遊び場の安定した継続的な運営のためと、本当に利用したい方が施設に入れなくなってしまうようにと有料(1人300円)。安全性を重視し、リスクを取り除いていること、清掃など環境へ配慮していることを伺いました。他の施設を視察することで、自分たちが大切にしていることを再確認できました。(視察者:松田顕子・岡村祐二・結城栄子)

米沢市/青空保育たけの子 山形市/たつのご保育園

新しい遊具を設置して、プレイパークの魅力をアップさせたい。そのために視察を通して遊具作りのヒントを得たいという思いから選定しました。両園とも手作り遊具を活用した野外保育に力を入れています。視察を通していくつかのプランが浮かんできました。①壁登りの横にボルダリングを設置してみたい、②砂場などにテーブルと椅子を置きたい、③北側の草っ原にタイヤコーナーを設けてみたい等々です。そしてもう一つ学んだのが「とにかくやってみる」の精神です。やっているうちに作るのが楽しくなっていくそうです。その境地に達することができるよう、どんどん実行に移していきたいと思います。(視察者:早坂美紅・安達恵美・三浦通夫)

大崎市/田尻子育て支援センター おおさき森の幼稚園

私たちが考える外部視察研修の目的は「自分たちの今後に繋げられるものを探す」「事業をより活発にする」の二点でした。その目的を達成するために、宮城県大崎市の二つの施設を選んで行ってきました。その中で、視察先の事業内容や思いをお聞きし、深く感じるところがありました。今回の研修で実感したことは、今実践している〈親育ち〉〈子育ち〉の想いと、市民や来館者の方々のニーズをより一層大事にして、各事業に取り組んでいきたいということです。視察を通して、私たちが大事にしていくことが明確になり良かったと思います。

(視察者:庄司美保子・高橋幸江)

仙台市/海岸公園広場 石巻市/NPO法人こども∞感ばにー

両施設とも大事にしていたことは「日常の振り返り、職員間の共有」でした。普段からその大切さはわかっていても、日常の業務に追われなかなか出来ないのが現状ですが、日常の活動が終わるとしっかり時間を取ってやっていました。日々の振り返りは、日ごろの活動、自分たちの動き、子どもたちの変化などに気づくいい機会になります。そして、自分自身の経験値となり成長にもつながります。私たちも、視察で学んだことを参考にしながら、振り返りや日ごろから気になったことなどの事案を出し合い話し合いを始めています。職員間が共有できるようにふり返りノートを作り、引き継げるようにしました。これからの業務に反映させ、職員同士話し合える「仲間」になっていこうと思います。(視察者:高橋陽介・細谷由紀・村山恵子)

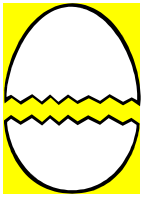
二本松市/げんきキッズパークにほんまつ 米沢市/米沢市プチハウス

二つの施設ともスタッフの方々が「思い」と「考え」を持って取り組んでいることが感じられました。げんきキッズパークにほんまつでは、子どもたちの安全と安心を一番に考え掃除を徹底しており、米沢市プチハウスではスタッフがお母さんや子どもたちに寄り添い、話を聞いて受け入れる事を大切にしていました。そして掲示物にはアイデアが沢山つまっていた。思いを持つだけではなくそれを形にするために、工夫し考えることの大切さを学びました。私たちも考えを更にしっかり持ち形にしていきたいと思います。そして、視察をした中で取り入れられる事は積極的に取り入れ、今まで以上に来館者親子の笑顔が見られるよう努めていきたいと思います。(視察者:渡辺友美・松本弘美・細谷祐子)

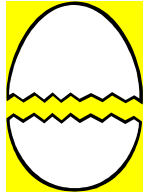
接遇マナー研修

施設コーディネーターは米沢市在住の人材育成アカデミー代表、黒田三佳氏を講師にお迎えし接遇マナーの研修を行いました。黒田先生の客室乗務員時代に培った接遇のノウハウを教えていただきました。品格(責任)のある仕事をするために心のゆとり=ホスピタリティの必要性など、先生の所作を見て気付いた事、講話を聞いて感じた事を糧にして、これからもタントクルセンターの顔として、来館者が気持ちよく利用できるよう努めたいと思います。(施設コーディネーター 奥山節子)

各外部視察研修の写真を1頁に掲載しました。
あわせてご覧ください



ほっこりあったが新聞



日々の出会いから生れたいい話

■心をつなぐけやきホール

最近、海外から旅行で東根を訪れた親子や、県内に住んでいる海外の親子が、けやきホールを利用してくれることが増えています。異国のあそび場に最初は不安そうにしている子どもたちですが、あそんでうちに色んな子が声を掛け、話をしなくても手をつないでいつの間にか仲良くなっています。お母さんたちも積極的にコミュニケーションをとっていて、「困ったことがあったら言ってね」「保育施設のことはここに行けば教えてくれるよ」という言葉が飛び交っていました。あそび場に国境はなく、いろんな国の親子が集える居場所になっているなど感じました。(けやきホール・高橋幸江)

■お母さんも本気！

毎週月・木曜の午前中に未就学児対象のあそびあひろば(あそひろ)を行っています。あそひろは子どもたちは自然の中で遊び、お母さんたちが子どもを見合う関係性作りの場です。でも、自然の中で遊ぶのは子どもだけではありません。虫やカエルが苦手だと言っていたお母さん達も自然の中に興味を持ち遊び始めるのです。はじめはビクビクしながら川に手を入れていたお母さんがいつの間にか裸足になり子どもたちと生き物をつかまえています。そして子どもたちは捕れた生き物に手を伸ばし、つかんだり動きを見て楽しめます。本気で楽しんでいる大人の姿は遊び場全体の雰囲気をも温かく盛り上げてくれるのです。(あそびあランド・齊藤翔太)

■みんなで見守る成長

7カ月から12カ月児対象のたっちサロンでは、子どもたちの「動きたい!」という気持ちが増すように、たくさん動くことが出来る環境づくりを大切にしています。また参加しているママたちも、我が子だけではなく他の子どもの表情や動きも気にかけてくれ成長を見守ってくれています。ある日のサロンで「子どもたちがゆったりと自由に遊べる雰囲気、いいですね～」と話をしてくれたママがいました。子育てしながら忙しい毎日の中でちょっと一息でき、みんなで見守る子どもたちを見守りあえる場をこれからも作っていきたいと思います。(子育て支援センター・渡辺友美)

■おもいでポロンポロン

タントクルセンター大ホールのステージでピアノを弾ける催しを、「スタインウェイピアノを弾いてみよう」として開館以来毎月継続してきました。ご家族連れの小さいお子さんから大人まで幅広く、リピーターもいらっします。毎回書いてもらっている感想の中には、「なかなかこんなピアノをホールで弾ける機会はないのでとても貴重な経験です」「子どものころ発表会でスタインウェイを弾きました。そのときの思い出がたくさん蘇ってきました」など嬉しい感想が寄せられています。この催しがまた誰かの思い出になればいいなと思いながら、参加者からの感想を励みにしてこれからも継続していきます。(施設コーディネーター・山田容子)

遊びは大人になるための準備③



本間義章くんの巻

(財務担当・財務室長)

昭和31年生まれで、今思えば戦後まだ11年しかたっていない時で、周りにはみんな農家の子どもで、ゴム靴を履いて、田んぼや畑で泥どろになりながら遊んだものです。泥だらけのゴム靴は一晩で乾き、またそれを履いて学校に行ったものでした。隣近所どこにでも小学生がいて、ガキ大将のもと、子ども同士でいろんなあそびをしました。

「はじめだー」は、2本の電柱に分かれ、はじめだの合図で、互いに陣地となる電柱を離れて相手をつまみ自分の電柱につれてきて最終的に相手の電柱に早く触ったほうが勝ち。ポイントは年齢に関係なく

自軍の電柱を遅く離れたほうが強いため、強くなりたければ何度も自軍の電柱に触りに戻るものでした。また、地面に近所の池や大木の名称を書いた枠を書き、石を投げて入った枠に書かれた場所へ合図とともに行き早く戻ったほうが勝ちというゲームや、缶けりなどの遊びもしましたが、どれもずるをして勝とうなどは思わず、ただ一生懸命がんばった記憶があります。そこにあるのは子どもどうしの信頼関係と勝負へのこだわりでしょうか。あそびの中にもこどもの世界なりの秩序があったのだと思います。

子ども若者の居場所づくり入門講座

本紙38号でお知らせした連続講座「子ども若者の居場所づくり入門」を、講師に滝口克典氏をお迎えして行いました。その講座内容を要約してお伝えします。



■ 第1回「なぜ、居場所が必要なの？」

学校や職場の環境は過酷になっています。今までは家や会社が居場所だったのに、学校も会社も一旦はじかれると、そこに戻るのはとてもハードルが高い。地域の目はきつく、自分が居られる場所は家の中しかない。これが長期化してひきこもらないよう、地域に居場所づくりが必要なのです。

■ 第2回「居場所とは？」

自分の望まないことは選択されない「安心して弱音をはける場所」が第3の居場所（サードプレイス）です。立場や境遇にかかわらず、つきあってくれる雑多な人々がゆるく共在しています。遊びやゆるさがあるがゆえに様々な文化圏の人々と出会うことのできる稀有な空間。これこそが「居場所のもつ力」です。

■ 第3回「今、私たちにできることは？」

人間っていろいろ、世の中はいろいろです。だから、まずは「受け止める」寛容さが必要です。いろんな人の状況をおもしろがる、いろんな人生の形があり、喜び、苦しみがあります。何があっても世の中おかしくないのです。いろんな人生に価値がある、いろんな苦しみも悲しみもこえてきた、それは祝福されるべきなのです。”世の中は多様です。その多様さを楽しもう！”こういう居場所が「地域」にいっぱいあれば、こういう場所を足掛かりにして社会に出て行けるのです！



講師紹介 滝口 克典

たきぐちかつのり 1973年東根生れ。大学院修士課程修了後2年間高校教師を務め、01年に不登校支援NPO「フリースペースSORA」の立ち上げに参画。03年に不登校の子どもに限定しない開かれた「居場所」とリベラルな「学びの場」を提供する若者支援NPO「ぶらっとぶおーむ」を立ち上げる。



この講座を通して、居場所作りに関して、私たちが思ったよりも多くの方々が関心を持っていることが分かりました。これからはその方々とつながりを深め、具体的な居場所づくりを進めていきたいと感じています。また、居場所とは、すべての子どもたちがその子らしく過ごせる場所。あそびあランドやけやきホール、遊戯室もそんな場所にしていきたいと思います。(細谷由紀)

新メンバー紹介

和泉 本子



6月からけやきホールに勤務しております。生れは村山市で、結婚して東根に住んでから22年になります。息子が小さいころ、誕生したばかりのけやきホールによく遊びに来ました。息子と汗をかいて遊んだ事が昨日のこのように思い出されます。そんな楽しい思い出のたくさんつまったけやきホールで働かせていただくことに、とても感謝しております。これからは、今子育て中の保護者の方々やお子さんたちが、楽しく笑顔で利用していただけるよう心がけていきます。

編集後記

★38号の「ほっこりあったか新聞」欄が好評です。仕事の中で出会ったいい話を共有し、さらに次の仕事に活かしていきたい。また来館者目線も大切に、私たちの気づかないことを教えてください。休館日に5班に分かれて実施した市外県外視察のレポートを特集しました。より充実した業務に向けて何が必要か、幅広い意見を取りいれながら業務改善に取り組んでいきます。過去に学び、現在に活かし、未来を展望する。そんなクリエイティブがしねでありたいものです。(M)

賛助会員募集

ひがしねの子どもたちの健やかな成長のために皆さんの力をお貸しください

個人・団体・事業所様からの財政的な支援をお願いしております。詳しくは事務局にお問い合わせください